



1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60

普請をさむの御事の家事の八角堂うなほ人の
汗のうらとくらむり慶堂大廈もそのうちを皆
百姓の勧めの微すいはむりとくとく小充玉
といふものあつたがる山の宮殿で奇羅少
主の小屋をうらむりうば姚垣といふ色の法子
見ゆ出の血山のうといふやう開宝塔といふ塔
塔城はくらとくらきと普請事務小田錫といふ
人あひたまの衆以為金碧瑩煌臣以為塗膏累血
といひあらあら百姓の相思の心ことかう
たる金紙を用ひて百姓の相思の心ことかう
お定を創家をうらむり漢の文帝ハ節儉の君と称す

宮室花園あくあくよくあ代のすかく増量とあふや
かあらとて家をそとてかと造りんと道を考へ
八角で積しとく全の八角とせんと道を考へ
せと百金取の中人を家の産とて山をあふて堀土階
三尺茅茨不剪采椽不削といつは世天子の階いれ候
と積構をうきのひとく簾あわらとて思ひあら
すとてまたとてのう
將軍家の軍車にうちへのみうい當式車小古の駕板で
あらをうねりとも同日の傍うと中略丸玉道の

儉を以てとくも儉は寡善の甚ひ奢い方患の如し 燈前漫錄

○まだすと、尾をさるぬと云ふと化さる有りうべに代てか
是れ豪傑が、先正天皇の御制をうほ詠と云す。而も尾をも
ねが、このをかく清けを清す庵のうのけの
豪傑かの御と思ふも割らうとで向ふとあく事
を割らぬでいとくば少ひな大活き主の宅の儉約をうと
ほをうとあそばう候ふと 尚晉帝範崇儉篇曰夫聖代也
君為乎節儉富貴廣大守之以約睿智聰明守之以愚不以
身貴而驕人不以德厚而矜物茅茨不剪采椽不剗舟車不
飾衣服無文といひ其本用とある。すまは采椽不剗かといふ
一のまなざしと一の申かひとまのを又の意をせしを

萬章按すも小今の世の侯伯うちでうる小第宅、考を引く
弓鞍刀鉢のふづら衣被よりはどぞ一切の簡度とくのやすと
の字も多見をので、おめ寧味清酒、あたまちよいとあれば
理候おのと候房小色あると氣ある女を多くたゞかるの
を修茶小はくづく。詫ある金箱でうるだまからうる御
持候あくまでもうすくみのうわのづく御殿の面壁町人と
年寄以上であつて取了やの国窮をうるうん路宿、寛む
あくまでもうむがたすみしあを経かずわく儉約である。
名門賢考たれをもといす關郡の玉章やくまをあきらめ
代まで小を侍る年山紀聞

○天子の子とあつてもおもておもて天子の名代この世を出る

えやの方武であれれあやの父母とまゆと天照大神
ひの神のあらわするは宮造の茅葺かし御代より
玄界を旅でうごくは食は味をものびて天下
の方武であると見詮ひ通をひきよもむけ法皇近
いへか年といふ故知はば代ふる孫小天王と達はる
候が、天子いわく附てから田打物りひき武の者とぞ知る
りて近事の帝いはくお小畠とめどもおまの民たれいふとぞん
と嘆て候ふ御是じに正直ておもづく方武と傳ふて御意とく
上一人正直ながり、や景武と申し上一人御はともや景武よお
ゆゑあるのじからだかのういなからすとぞも
まつまつと
とんび
しゆう
らう

そりへはまうかへまく、まほせよおもて
いと毎のいいやけあひばらのたんじはまやうわくの
をあくまくが、やまがまくはくはくはくはくはく
もいといふる武の兵でたまけん爲たうおは女うが
かくあらう、お聖ぐのひふうひふうあくまつるぞの
かやのあらうの詔ふみ武をあくまつる、過ふ叶ひ百六十年
治つるうれ代日相持す時、最めちのひと遠に一人、崇華
を極え美女とぞ、酒で出のミ袋の薦、宿いとばす
奢を極へる天罰小きうち生れの切をむかへし、一門
あやしく、纏寫う首で刎らきり、竟とくすら、宿四百
余歩のまく、聖く、舞はかの後を天子とぞ、聖くさる

孔家もの竟華のうちを経たまひ、竟華のうちで
儒者といふ儒者を學問とぞを傳承とぞとぞとぞとぞ
天罰でれをせず、武を若先とぞ、崇華小きうち天罰う
少條時政を新朝の舅とぞ、自持、天罰をあくで九代百六十
年治つる時政の後泰時と敵めちび二人かゝを辨知く
人きあひ二人の志す、てふ百六十年治つる泰時、
天照大神の旌をすり天下方武をあくまつるの崇華でまく
す、て家后を崇相とぞ、葉地をまくもとづき、庭ち程あ
人きあひけり、はぢなうそのとぞたぶらふあお舍とあくう
まづうかくは用ひの爲とぞ、ほづれ葉地のうけをもと
ほくろひひやと、ヤハサ、ノツキ、ノツキ、ノツキ、ノツキ

は築地の時程もどもかほゞう哉の都よりをとど
あるかのく泰時やすとき忠節ちゆうせきをなぞりてとちせんせん
さる用ひにかゝたゞ後ごの築地つきぢすありともかのくがまら
誓う武の娘むぎよをえうがまうい翁おきなあうむほりふるふるうを
す用ひにかゝざれかと竟よう四百余かの天子あまのこをも家の
地形じきょううちかこへかくを相あわせてぞかわぬにの小口こくちをもつて
たるあも割らばわらば沖おきにやうがせせがめいをへりうす金かなる
物ものをものへず築つきのありきのうそをもとめひく天子の
万民まんみんをつのひのあがめあがめとあがめと海うみをよりまく行ゆくる行ゆく
年としあいようびうきなきなき度と時代じだいのたかくかく小川おがわ競舞きぎよ
の時代じだいとあるふだくとあるふだくととあるふだく 暑寫先生しょぞうせんせい書かべられ文ふみ

○いとやうに時先ときゆす侍し一古こ歌うた

よふ小のうきとやきとやき鳥體とりたいのうきのひの事ことのちくを
比翁ひうのあくろをかほりきよかか初はじづくと教養きょうようのくわくと
さるさる吉田よしだ学生がくせいの友ともの歌うた

かくすも極きわをばせきのそれふくうとまよわくとまよはせす
はくの意いを曉あくとあ年深くわん情じやうの家いえ小安こやすんすあ思おもす
まくお枝いせき一實じつ小膝こひざを寄よのよもかといとよもゆきす
よきふやせんすすふきりいあふ一復ひとよあり吉田よしだ子定こじょうのよもよ
東とう園えん中なか納なその極きわのひ漫まん室しつすが子堂こどうふとく一慶ひきと括くくしや
十六じゅうろく年としあふいひいひがす造つくりはせんとおちか摩ま小子定こじょうの言こと
思おもひかう思おもう思おもう 梅寒ばいさん漫筆まんし

○甲斐源氏一隊次第都忠條より企ありとす賜倉殿より
詔ちくらわせふ、壽永二年六月十六日殿中少佐の三連
たまふ 中略 ゆきいもひ
都忠が侍郎卒也同武家興市井少村ト大内守

打ぬふへあせりへ庵厨をとどめんえふ侍の今合新朝
の客店ちのへ龜板のあふるはるかに索すみればこれ
特徳あり鶴齋早雲の歌あづねを時事の居宅といふも
万古の質素のたゞくとくとくう
一あらへお詫た工の法小隱食を形の法なりといふ六方小
七面や一ト株の木のたゞくとくすがおもつてこそあれとせ四柱
武将をひき一株の定まらしむる

一あらへお詫^{まこと}大工の法^{ハシマツ}小彌^{ヤミ}食^{ヒムク}形^{ヒメイ}の法^{ハシマツ}といふ。六方小
七方^{セブ}一^イ株^{ササガ}柱^{サスガ}のをやうすきかまうとくとあるとせ四柱
さゆをひく一^イ株^{ササガ}の定^{タマ}をひくわ
○向^{むか}いの國^{カント}の節^{ハサウエ}肉^{ハサウエ}遠^{アリ}い時代^{トキ}の家^{ヤシナ}族^{ヌメ}の家^{ヤシナ}いは連
はれたり^{アリ}於^{アリ}御^ミ殿^ミを^{アリ}小^コ侍^{シテ}を^{アリ}候^{ハシマツ}小
ちゆうたる^{アリ}あすくとも^{アリ}あとの家^{ヤシナ}のよ^{アリ}坐^{シテ}候^{ハシマツ}
養^{アシテ}いふは家^{ヤシナ}を^{アリ}大^カ改^{ハシマツ}後^{アリ}あ^{アリ}老^{ハシマツ}大^カ改^{ハシマツ}後^{アリ}知^{アリ}名^{アリ}の^{アリ}と
どろ
ちやの
ちやく

幕へてまくらの節を博遠が赤きものとす
不ヤ及二三丸赤郭小屋は家化す。終り
かひ者か少隣内に於て家屋小屋の欠ヤ多
くあり候也。ども豚肉の駄小走けりぬと
きと云ふ。同室もまた甲筋をなべ成る。其
は基あいかやと云ひ度りりてゐる。とも御
ひ言霧のよう。船板の幅のむろと二倍か
義もまたと聞く。右本多信度也。あよりう若
お氣の他事よりの事。右者たゞかく。叶ひ不
かんきんま。身言霧也。かく清善清祐はもとのう。左方
いをかく。左城をやあある。左方

筆の家々は機ひあともありますばかたと二の丸よりおまき
る場を埋立當普請を以てよどみと云 落穂集

人城を望み、渠水を引く事無

代の家とお構ひあつたをかぎりすれ申せど二の丸の左
より堀を埋立、沿岸溝を引いたる所と云云 落穂集

かのとひくまをあら
うるおとねまほん
うるおとねまほん

○商
田の事、一
支、あらわすもの通つて、うそを告へ
曰我らは年久
しるそ
ても貧乏がむ枯草有りぬかとおもひ定め其上をも

たまうるをすむが、さかの家をあゆうておれまよ。我も
おぬ有うるたゞくお能くわざうる家をやがてひそめの時代に活け
因縁ひきとひんの縁はまひる三次とヤア那を以てあ
まふるの身上とぞうどもえ集ね重安藝ち。後家をもとの家を
以て知れよる万石ち小舎をひつ萬丈の折子も實らきおもて
ひづきひづき春門の窓人をひ缺くゆゑあるをわづつひ開
かいへ 檻除あともせ壁主人相はせりやかく有く
ある時あひ居合を不やひてひも小虫大ねぢ殿ひへ集あひ
しゆど詠うる女房たばへづら春門をひいとひ大ねぢを
みく能くお内家を取とて差ひだ。のうやひはあお子供の時
わくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

がきのうふくわゆるかひり星姫夫人をへやつま家
相勧められ、前後五年たゞりの御用事すと勤務を終
そは善清が本務候の御内室は星姫夫人也。お定めも
根有密候わざあらうる。侍士夫人、よろしくほりわ
相清わざくらむ。 同上

○寡處の國於に村の百姓せし畢竟もあらむる
さみの處にあらむるありともあれ、床を張りあまふて
浦すらあると一朝すまゝ男女とも、家が布疋へやうのでは
一纏の茅かなゆ一葉かく葉をたゞ林へゆきのむらのね
有るかく時代の老人によひのぞみを、かお暮りてつたまふ
る今どきの百姓どもの家私もよほいた、のひい床を張りま

一
をお詫をおち間か候ただうへておまへにまへ
「あ
のうがふれつておおきの事も聞かぬとおもひ
よへつ
の事かたゆく　おまへにまへにまへにまへにま
おやつ　育ての村のあらも西はるはる
え
諒諒たまふれつておの身をなすとやむおもての身
ちやく　あいびき
育ての身の身の身の身の身の身の身の身の身の身
は
はあへりまし

はれこむはるひ 同上

まちまんどのまゝへまち
ひらめく風景を表す代わるやうに達する事からいふこと
百才の家を旅館となす事よりあるの百才の住居特門として
はるかがくがむきの旅館を人所と云ふ事で駿河の
おもてたれづれづれの雲と云ふ事である。

年少の頃から家業の手替りを取つて、十数の手取
も小首をとむるの手筋ハンドジンを武具ムツクの用意
費用小算ムダシキをひかせと身向ムツカシへ腰革ムツヅクをは
地チを立タマフし立タマフし立タマフし立タマフし立タマフ
敵中チキウに據スルの事モノ知ルらず清軍セイゲン取リあらざル、軍内ムツナであ
ずうち元モリ一ヒ本代モダもくはまきあムカシ、お廻ムラシの者ヒトの夢ミム

卷之三

當世下手談義

りやか
りやか
えぐ
ひこちーく！

長者宅

長者 宅
アリバフド、ボリマタツカハラニ、タダレインレハナ
在淡城郡袴塚村、蓋古那珂郡地、倭俗謂富豪為長者、
此所謂長者不知為何姓名人、國人相傳長者富豪聞

於天下其宅地方十餘里堀河天皇永保年中陸奥國
巨魁清原武衡友源義家拜斧鉞東征率十萬餘騎路
經本國長者迎勞義家饗十萬兵於宅三日三夜人皆
驚歎其巨富義家暴師與刈三歲武衡伏誅義家凱旋
再過長者勞饗如初義家曰為人臣富豪未聞有如長
者他日為朝廷患者必在此輩不如滅長者以絕後患

竊遣衆掩殺長者云、

寛永年中野人耕野多得猪鹿頭之枯骨不知其有幾
千萬相傳斯地是長者庵厨又多出破瓦其瓦堅緻有
布帛紋或有文字美澤可愛好事者用為硯絕妙世人
鄴瓦試以瓦投石石或損缺瓦如故、

あらあ戸里人の話むりハ傳本中義家り云
さう一木舟は一蓋長者といひ今も房総那志渡
里村ともある金森の辺あるとこらの木舟因縁いふと
いふいのちくある川古身を投るといふと
とれ一ツの壺と金の鏡と金の輪を棹す川かへまくと
今との川の壺を手に持てばう川下小中山傍かたの
や一木舟の深き湖小舟の壺の古身をもつてたりと
若門義家のあらうは壺小舟縁ひと取れうとまづが今
御家と船一木舟は墨壺は深窓とくわくとくわくのや
ば壺いと東岩室の御家とくわくの壺たあく残のや
とくのや年齢を考る小武衡謀小佐一木舟のや

天皇寒夜え年がりてゆきとく義公のことゆふる和丸
三百六十里をあまくあらめかく頃をはく水中小
あらううの辛妙とすゑくらう令鶴をやうりんいわうか

しをさゝれ
神社の寺禁物は此處から尾羽の歸り紀行の
雷火戸のやうに傳へてあるが、この事
もあからざるといふは其寂ちふ納多の御子
が「もとよりおのれのちから」の彼も育つて仕合
てゐたが、物じよをせんざくしておもひがいに宿ゆ、
てあるからといふも當らぬものなりふむちのまのつの
わらふおどりのまゝにまづうこまおまくら

まことにあらうがつゝもので、とて
ふいにふくふく、僕の酒樽さけをたぶらかすが、あるも
のもあらず、とて、そのうちつづりのれりといふ事も
すゞよや一ト、おこごんおこごん、とつて、
まちがひともあらず、空浦うつうらの酒樽さけをすかすかとつて、

○古巣の旅中お酒が福金のお手の本家は籠ほた。四萬町の店
宅柄ぬれに宿へてとてりを相ひてひそむ。御宿小延喜より
たよて。今まゝ年あつた高町に高町通りとのお新橋をどり
おなじ古事記の武士を浦へて船のやへておもわくらへる。着年
のつづり

○紀伊守人小早丸 桂済元とひ人とひの京守小早丸 清福院
土佐流の師也

ひふ一物をかづりかへ深経句薦といふ是芭法郎の三味
錦小袖を在室の傀儡師通じてとらすとの小人形を龜子
よりあじらうる京郊なればまくやせは狹小は小袖の里
中格慶小袖などのひよぶ。蔽面がる小笠居を達うめのあを
諸人共をもむかせし寒水年中のさとひのる小勝唐草相在
府の日章ぼうしをうるばひの身の身色を徘徊する物
あの身色を今も持てへ無のあくまほ候日持被小指も身
行せしをもつておの小平たゞ人形あらわすち偶あり
依う高津氏たゞの無く通四町同小京ちよつと
にテ中そぞまとたゞくのく際世と候る人形腰脣をとひ
レアリあり一かやなつ不ありの人物を本偶かへり

さかみより小平たゞの幕を用ひてゆが彼館もむほの幕
及び布代すに案の致たの内に十文李を付すであら。無う勢
からむき節の津陽理も曾我あぐらを致多比院兼十文李
は高津の致くのくもむを十文李の御家の人形と小平た
かくすしはまどり跡半腰もとて小平たゞを唱へり
小平たゞを世よと津陽理が本の人物を用ひてゆが
あ小船をうち東代の華美をあらわすが 同上
○泰和十九庚戌年八月一日護府に於て高津家久とお振舞あり
高津介殿能事の節後唐衣の出たまびらかに近表
中、うの彼ナよらるる

内府檢封將總領之職一
治世錄

○もくらわちの船を荷てておおきいも稀と牛の小向をうけ
○あはれ十じよのまつりすけ町家は有施たる町人貧乏酒全ながる
○もくらわちの百石や百石位の人持ぬが多一 古老物語
○もくらわちの富町もせかがいも大おのかひ庵がさのが相うちりが
○を身にまほる爲めにやのうの用ひより一むくらわちの富町も
○おはらがいの東の方へとてやうへとてやうへとてやうへとてやうへとて
○ゆくがまほらがいの用ひより一 同上

理爲曰今かくもかのうのうふにねむるに
田舎ふらのま
はるかにうれしきのうのうじ見なすを載つゝもあひて西園
いれぞ
いれぞ

むかしのこゑ

○鳥羽を度に、お水桶あつて、十石をあらま
りひそけ四枚のぬかるみ紙二枚ひそけられ一御
三事への扇筆あらまとのやつと年月をもくろ
アリのきのうの御度をもくろへ経時をもくろま
シテの御度をもくろへ経時をもくろまのやうも煙
火の御度をもくろへお宴とくらみ奉内院さんかくのうれしも古の御度を
おもひ出でてもうれしも古の御度を
まき
わはは、おはよ三年在府との御度をもくろむる愈々を流連
あはは、おはよ三年在府との御度をもくろむる愈々を流連
のあはは、おはよ三年在府との御度をもくろむる愈々を流連
おはは、おはよ三年在府との御度をもくろむる愈々を流連

ありあつせざる事無くしてのや　寔の一

○お宣の御恩居所の御使御縛りうげ手書の筆と御名と御記を
御手を達へて六十金の金子の御事とする。自分の身の事を
知らざる事の御狀ある事と人をある事。付とある事と
お身をなす事と。明君言行錄

○大河内全き幕貨、素おもとものに小字元も玄界で能く、
そやう大さのふねをあらわし、其せうのを全き事。このふの船
よもよ寄附とりふねをあらわし、其せうのを全き事。二百石
三百石の丸いや、不及興力在中の士町と医者治人の用事の町
人、宿泊するも所をいげとしのいと御玄界は、つるりとそ
かくはりおまほ丸すとせうとひ言軍法と云ふ船の下

板敷小一間の表を垂らす。使者と奉者お在礼式をなす
あやむがれおとそ玄界の榜巾御間よりうちくる船をなす
きのこと全き事やうと。 智囊後鑑

○むづかずあ戸といひす。御殿布あの端小あみをいふ端ねうと
戸といふそのからちがう。あ戸いとと板戸の二板じ車戸の
戸をかうとあすら。御玄界の轡あみむりと御簾子といふ
今の轡子のすと世稱をいふ名もくとある。 四方硯

○天地すと世りはくと御みすとありと花あまよ度那朝食と云
事の山中ふ思ひの空を遣らす。おけうが木を殿といふ
事あくとほくとすとすとすとすとすとすとすとすとすとすと
のもの。 齋場取にはくと彼の例と民をがくとめ造も僕徇う。

おとせやひひうらむちの宮の宮かちのちく用ひ量の物で
あらううきう例へ 小訓抄

○かこそだいをもうの株のわづや木と土代ハ賀朴とも神の御殿手
茅ぬれたが風でれさるたそでかげ不本を用ゆ風たゞえあと人
あやそとの場をせがりふとどといふも母モ神代の神いゆつ
とぞ人玉のほの神々や木とくどは侍し 難波土産

三首錄下終



